アメリカの5週間[1]（帰国報告）

岩　村　　忍

3月1日から4月6日まで5週間にわたりアメリカを旅行したので，事務的な報告，およびそれに二，三の感想をまじえて記しておきたい。

3月1日東京を出発して，まずハワイに寄ったが，当日は健康がすぐれなかったので，予定はしていたものの，残念ながらハワイ大学にも，The East-West Center をも訪れなかった。

翌3月2日サンフランシスコ経由で直接ニューヘヴンに赴いた。エール大学で催された HRAF の年次会議に出席するためである。列席者は多数にのぼり，ピッツバーグ大学のマードック氏が出席したが，かれはHRAF を現在の形態にまで発展させた功労者である。

その中二，三を報告するならば，第一に，フアイルの中からどのようにして目的のスリップを取出してくるかといった煩わしい操作上の手まをはぶくためにIBM の使用を計画している。もっともそれは，いぜんとして，技術的に難航の模様であるけれども，数学者，電子工学者の協力をえて研究中であるから，将来は実現されるだろう。第二に，フアイルのスリップの数は，現在のところ，だいたい300万枚位とのことであるが，日本の部がまだ整っていないので，増加しようという案がある。その時は京大も協力しなければならないと思う。この会議で京大の HRAF 代表者としてわたくしが理事会のメンバーに選ばれた。

途中ハーヴァード大学には，わたくしの専門にも関係するので立寄った。同大学の東南アジア研究にかんしては，個々の専門家はいるけれども，組織的な研究の段階にはいたっていないと思う。

3月15日から3月20日までのニューヨーク滞在期間中に，コロンビア大学を訪れた。ここでは東南アジア研究にかんする委員会（Southeast Asian Studies Committee）を組織している。元来コロンビア大学では，新らしい学部やセンターを創設するにさきだち，委員会を組織して，設置の当否，組織形態，また研究路線などを検討・討議する習慣がある。それだけに，Southeast Asian Studies Committee の存在は当大学が遠からず東南アジア研究に本格的に取組むであろうことを強く感じさせられる。委員の人々と会い，旧友でもある若い人類学者マーフィー氏，またアルタイ研究の人たちとも懇談した。

なおニューヨークに行く前にシラキューズ大学に2日間滞在しボールズ，クレーダーその他の人類学者と会った。

コーネル大学ではシャープ，スキンナーその他に会った。スキンナー氏は日比野教授の班である華僑研究に注目を寄せている。この班が華僑の発展史を問題とする上での資料，とくに刻銘と家譜家乗などの史料を収集しているのに特に注目していた。そして，この目的が単に計画の段階にとどまらず，現実化していることを聞くにおよび，スキンナー氏は，ことさらに大きな関心を寄せた。そして京大で収集した関係資料を見たいこと，また両大学のあいだの資料交換について話あった。スキンナー氏は中国語ができ，革命まで南中国で実態調査に従事したことがある。コーネルでは，東南アジア研究のランチオン・ミーティングに出席し，多くの研究者に会った。

エール大学には HRAF 年次会議の前に4日間滞在した。そのときセンターの留学生として在学中の酒井君に会った。現地に早く行きたい強い希望をもっているが，エール大学留学は非常に有益であるといっていた。

エール大学ではペルツァー，ベンダ両氏を訪れた。両氏とも京大の東南アジア研究センターが自然科学部門をも取入れていることに興味と関心をいだき，社会科学部門と自然科学部門の協力の必要性に同調しており，京大におけるその協力の状態などにかんして質問

1) これは，当センター所長岩村忍教授が，さる4月25日の研究例会において，アメリカ出張について報告された内容を編集担当者水野が要約したものである。なお，末尾に全米アジア研究者会議について若干の説明をつけ加えた。

を受けた。そこで，今のような協力体制が将来どのように総合的な，お互に役立つものになるかどうかわからないけれども，地域研究に新らしい方向を見出すために実験的な試みとしてこの方向に推進している次第だと答えておいた。

ニューヨークからインディアナ大学を訪れる途中，ジョージア州のアトランタ大学を訪問し，封建制度の大家であり，トインビーの親友でもあるクールボン氏に会った。これは東南アジア研究に直接関係がないので省略する。

ブルーミントンには3月23日から26日まで滞在した。その間，ずっとインディアナ大学の歓迎を受けた。それは単なる歓待というよりも，同大学の積極的な態度を示すものであった。地域研究，アジア研究の人々に会いインディアナ大学と京都大学の協力について討議した。ここ1年間のインディアナ大学の発展ぶりはめざましく，それは多くの新らしい研究計画や新らしい建物からもうかがえる。そして同大学はいまでは米国内の全州立大学中10指，いな5指のうちにかぞえられるといわれている。

3月26日，ロスアンジェルスにあるカリフォルニア大学にはアメリカ研究の用件で立寄り，京大アメリカ研究委員会の要請で打合せをした。

最後に，4月2日から4月4日にかけてサンフランシスコで開催された第17回全米アジア研究者会議に出席し，「アジアにおけるアジア研究」というテーマのパネル・ディスカッションの日本の部を担当した。この討論会は非常な呼物で，数100人が出席していた。その他会議期間中には，東南アジア関係の部会に全部出席した。またこの期間中に多くの人々が京大東南アジア研究センターの組織，ことに社会科学と自然科学の協力の上に立つ総合的研究の組織に深い関心を寄せていることを知ったし，またいろいろと質問を受けた。

つぎに東南アジア研究にかんする部会，討論会の内容を簡単に報告しておこう。2日の午前中は Southeast Asia during the Second World War というテーマで，議長には University of British Columbia and University of London の D. G. E. Hall 教授がこれをつとめた。発表担当者は4人，Importance of the Japanese Occupation of Southeast Asia to the Political Scientists を Rutgers University の Josef Silverstein 氏が，The Burma Independence Army : A Political Movement in Military Garb を California Institute of Technology の Drothy Guyot 女史が，The Philippines "Collaborators": the Suruival of an Elite を University of Michigan の David Steinburg 氏が，Indonesian Reaction to the Japanese Occupation を Cornell University の Benedict R. Anderson が発表した。ディスカッサントには Ohio University の Willard H. Elsbree がなった。

2日の午後は部会を閉じ，Asian Studies in Asia のパネル・ミーティングが催された。Yale University の John K. Fairbank がディスカッサントであった。発表担当者は5人，日本の部はわたくしが受持ち，フィリピンは University of the Philippines の Ruben Santos Cuyugan 氏，インドは Museum of Calcuta University の N. K. Bose 氏，マレイシアは University of Malaya の S. Arasaratnam 氏が受持った。そして最後に特別報告として，University of Warsaw の Leon Gladicky が Mainland China を担当して，中国におけるアジア研究について要領よく発表した。その内容は非常に興味深かったが，かれは北京大学で博士号を取得した最初の外国人だといわれる。

なお Fairbank 氏は昨年，全米アジア研究者会議の会長を勤めたが，今年は Yale University の Arthur F. Wright が会長に選ばれた。両氏ともかつて日本滞在中は京大・人文科学研究所で研究していた。

4月3日は Bureaucratic Systam and Their Relations to Political Development in South and Southeast Asia というパネル・ディスカッションがあり，Duke University の Braibanti 氏が議長となり，ディスカッサントには Indiana University の Fred R. Riggs がなった。発表担当者は4人で，ビルマにかんしては University of Califolnia, Los Angels の James F. Guyot 氏，インドにかんしては Oakland University の David Potler 氏，インドネシアにかんしては Princeton University の Ann R. Willner 氏，ネパールにかんしては Merill Goodall 女史が受持った。

4日の日曜日には，Modernization Process in Southeast Asia というテーマのパネル・ディスカッションがあり，Cornell University の Lauriston

Sharp 氏が議長となった。問題がわれわれセンターの研究課題と同じであるだけに，ことさら興味深かった。発表者は4人であり，Wasington State University の James W. Hamilton 氏が，Kinship, Bazar and Market : The Current Development of a Jar Economy as an Aspect of Modernization を，University of Michigan の Guyl Ness 氏が Modernization and Indigenous Political Control of the Bureaucracy in Malaysia を，University of California, Burkeley の Joseph Fischer が Education and Political Change in Burma and Indonesia を University of Virginia の Richard J. Coughlin が Religious Lebels and Socioplitical Change in Southeast Asia を発表した。なかでも第3の Fischer の報告はビルマ，インドネシア，タイの教育にかんするもので興味深かった。かれは東南アジアで教育関係の実態調査を試みた人であり，特にインドネシアの教育にかんして興味ある問題を報告した。ディスカッサントには University of California, Los Angels の Michael Moerman 氏がなった。

以上，全米アジア研究者会議の内容にふれたが，それから明らかなごとく，東南アジア研究関係のものは数も多く，また内容も豊富である。こうした点はセンターとしても注目すべきところであって，各専門家がこれらの研究者と連絡をたもち，協力しながら研究を進めて行かねばならぬと思う。

なお，この会議について若干の説明をつけくわえておこう。会の正式名は the Association for Asian Studies というが，その前身は Far Eastern Association であり，元来は主として日本や中国の研究者のための協会であった。戦後東南アジア地域研究の重要性にかんがみ，この地域をも加えて全米アジア研究者協会が結成され，今年はその17年目にあたる。この変化にともない，機関誌 The Far Eastern Quaterly も The Journal of Asian Studies と改められた。こういった関係をもつために，日本や中国の部会も盛会であり，それにインドの部会，またアジア全体に共通したテーマの部会も設けられていた。会議全体に通ずる中心的なテーマは，やはり，アジアにおける近代化の問題におかれている。

日本の部では，明治後期から大正期にわたる政党政治の展開；日本社会の基本的特質ならびに変動期におけるその特質の持続性；経済成長の社会的要因としての業績主義的志向，官僚制，制度的機構の特質；日本と中共，台湾，北鮮，韓国，東南アジアとの関係；日本の大衆文学などについて報告と討論が行なわれた。中国の部会にかんしては明朝の形成ならびに明朝政府と西欧との関係；中国経済史として宋代における市場と企業の構造，19世紀後半における鉱山業，家内企業としての木綿織物の発達；中国共産党の史的発展；中共にあける社会統制；現代中国が直面する文化的諸問題；さらに漢詩などのテーマで会議が進められた。

インドにかんしては地方におけるエリートの抬頭；19世紀ベンガルの西欧思想に対する反応；インドにあける都市化の諸問題ヒンドゥ教の発展；インド宗教叙情詩などをテーマとして取上げていた。これらのほかに台湾にかんしては社会的・経済的変化と題して，土地制度改革，土地利用，伝統的価値体系と近代化，出生率の変化などの報告があった。

アジア共通の問題としては，インドネシアとフィリピン，インド・パキスタン・セイロン・タイ，日本と中国などにおける人口動態；中国，フィリピン，インドネシア，タイ，インドにおける宿命論；自己規制と政治的能力，歴史における個人などを取り上げた報告があった。そのほかインド，東南アジア，日本，中国とアフリカとの関係を論じた興味深い部会も開かれた。

以上のように，全米アジア研究者会議にはアジアの諸地域を対象とする学者が集まり，それぞれが自己の専門分野をいかして，さまざまな角度から問題を提起し分析している。包括する地域は極東，東南アジア，南アジアを含み，また研究者の専門分野も多方面にわたるけれども，アジアの近代化を一つの共通の問題として会議が進められた。機関誌 The Journal of Asian Studies もまたこの線にそって編集されている。